

4 分析結果の概要（詳細分析は、8ページから24ページに掲載）

(1) 論理的な文章（大問〔一〕）を読む力について

齋藤孝『コミュニケーション力』から出題した。比喻の内容を選択する小問四、指示内容を答える小問五は、文脈に即して読む力が必要になる設問であったが、共に上位と中・下位層との差が大きい。論理的な文章を段階を追って読むことの指導と共に、抽象的な表現と具体例とを対応させて理解する読むことの指導の工夫が必要である。

(2) 文学的な文章（大問〔二〕）を読む力について

竹内真『自転車少年記－あの風の中へ－』から出題した。全体に正答率が高いが、その中で小問二の正答率が低いのが目立つ。前後の描写を根拠に、脱文を補う箇所を選択させる設問である。脱文中の語句を吟味し、空欄前後の対応する描写を根拠にして脱文箇所を確定する力が必要になる。誤答は「既視感」と「視線」という単純な文字の対応に反応したものと分析でき、表現に即して内容を理解させる指導が必要である。

(3) 国語基礎力（大問〔三〕）について

設問は、施設の利用案内の内容把握、漢字の読み書き、慣用表現に関して出題した。全体の正答率が比較的高い設問において上・中位層と下位層との間の差が大きい設問が目立つ。国語基礎力に関しては、抽出校を対象に、読書等の日常的な言語活動に関する「事後調査」を実施して分析に活用した。手紙の宛名、慣用句等の全体の得点率の低い設問について、上位層においても授業以外の言語活動と国語基礎力の定着とに相関があることがうかがわれる。

(4) 古文（大問〔四〕）を読む力について

『宇治拾遺物語』から出題した。和歌を含む出題であった昨年よりも正答率が高いが、古文において層の差が見られる傾向は変わらない。語句の理解と共に、古典に見られる美意識や価値観を継承させる指導の工夫が必要である。